毛利元就

中

内館牧子

NHK出版

九州の花

中

内館牧子

苏工业学院图书馆
藏书章

NHK出版

毛利元就 中

一九九七年五月十六日　第一刷発行

著者……内館牧子
ノベライズ……三原庸子
発行者……安藤龍男
発行所……日本放送出版協会
〒一五〇-八一　東京都渋谷区宇田川町四一-一
電話　〇三-三七八〇-三三八四（編集）
〇三-三七八〇-三三三九（営業）
振替　〇〇一一〇-一-四九七〇一
印刷・製本……図書印刷（株）
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。定価はカバーに表示してあります。
Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の無断複写（コピー）は、著作権法上の例外を除き、著作権侵害となります。
©1997 Makiko Uchidate Printed in Japan
ISBN4-14-005260-0-C0093

毛利元就 中

装幀……芦澤泰偉

装画……奥田元宋「山澗雨趣」より

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

毛利元就

目次

頼もしき伴侶 …… 5
生と死 …… 56
女神現る …… 113
三本の矢 …… 161
郡山籠城戦 …… 238
敗走 …… 290

主な登場人物の関係図

〈毛利家〉

- 美伊の方 ---------- 藤野（美伊の侍女）
  - 毛利元就
    - 杉の方（元就の育ての親）
    - 相合の方 ―― 元綱（元就の異母弟）
  - 隆元（幼名・千代寿丸）
  - 元春（幼名・松寿丸）
  - 隆景（幼名・徳寿丸）
  - 可愛（元就の娘）

毛利家家臣
- 福原広俊
- 桂　広澄 ―― 元澄
- 井上元兼
- 志道広良
- 渡辺　勝 ―― 通
- 赤川元保
- 児玉就忠
- 国司元相
- 粟屋元親

〈尼子家〉

- 尼子経久 ―― 詮久（経久の孫・のちの晴久），国久（経久の次男）
- 尼子家家臣 ―― 亀井秀綱，宇山久兼

〈大内家〉

- 大内義興 ―― 義隆（義興の嫡男）
- 大内家家臣
  - 陶　興房 ―― 隆房（興房の次男・のちの晴賢）
  - 内藤興盛 ―― 寿（興盛の娘）

〈村上水軍〉

- 村上虎吉 ―― 加芽（虎吉の娘）　野田次郎（家臣）

頼もしき伴侶

永正十四年（一五一七）冬、どんよりと寒い猿掛城で、元就は気の晴れぬ日々を送っていた。

誰もが負け戦さを予想した有田城の攻防で武田元繁の首級をあげたことから、「毛利に元就あり」という噂が安芸国はおろか中国地方全土を駆け巡っていたからだ。武田家といえば、かつては安芸国の守護家であり名門である。そして、かつての威光を失いつつはあっても、銀山城主・武田元繁は輝かしい戦歴を持つ武将である。これに対するに、元就は二十一歳で初陣。しかも戦力は五千五百に対するに一千五百。この負けて当然の戦さに、元就は勝ったのだ。

それから一か月余り、本来なら、してやったりとはしゃいだ日々を過ごしても当たり前なのだが、元就は額に皺を寄せるばかりだ。その代わり、杉が一人で浮かれていた。

「神社に詣でても寺に参っても、元就様の噂で持ちきりじゃ。皆が浮かれておって、元就様を褒めておる。私が目立たぬように目立たぬように拝んでおっても、すぐに見つかって、『あ、元就殿の母御前じゃ』と言うて、大騒ぎになるのじゃ。もうもう恥ずかしゅうてならぬ」

そう言いながら、これ見よがしに、あちらの神社こちらの寺と人出のある場所を選んでは出かけていき、元就あっぱれの噂を聞き回って、浮かれている杉である。

「杉殿、元就の噂は決して喜ばしいことにはござらぬ。皆は、どうも毛利が少しずつ強うなってきたと思い、注意を向ける。当家のごとく、少し頭をもたげてきた家は、目立たぬようにしておるに限りまする」

元就が諫めれば、久も意見する。

「杉様、武田元繁の首級をあげたは、まことは元就様のお働き。されど流れ矢のせいにせざるをえなかった元就様のお気持は、そこにござるのですぞ」

「さよう。幸運にも元繁の首級をあげたものの、毛利は他の国人たちとの盟約を頼りに、精いっぱい生きるしかないのじゃ。毛利だけの力では何もできぬことに変わりはござらぬ。浮かれてはなりませぬぞ、杉殿。これ以上噂が広がれば、毛利はつぶされまする」

元就の憂鬱のもとはここにある。

安芸国の国人盟約に加わっている者たちの心中を推し量れば、目障りにならぬよう、むしろ頭は低くしていなければならない。突出すればつぶされるのだ。

当然のことながら、尼子経久も元就に目をつけていた。

月山富田城に腰を据えたまま、元就の動きも評判もつかんでいる。

「欲しい……」

妻や重臣たちの前で経久はつぶやく。元就を取り込んで、大内へと向かっていきたいのだ。
「それにはまず、盟約の国人衆を我がほうへ引き寄せることが肝要にござりましょう」
宇山久兼が答える。
「実家の兄も元経殿も、お味方にござります」
経久の正室・萩の方も口を添える。萩の兄は小倉山城主・吉川国経である。今は嫡男の元経が家督を継いでいるが、国人盟約に加わっている吉川もすでに尼子に傾いている。だからといって、すぐに毛利が尼子につく保証は何もない。
「……まだかかるか」
経久がため息混じりにつぶやいたとき、「美伊様、お着きにござりまする」と声がした。
「美伊!?」
ぎょっとして経久が萩に尋ねた。美伊は、吉川国経の娘で萩の姪にあたる。
「ああ、吉川から季節の進物を届けると知らせがありましたゆえ、美伊がその役を仰せつかったのでござろう」
「わ、わしは逃げるぞ。あの子は苦手じゃ」
経久がそそくさと腰を上げようとしたとき、もう美伊は入ってきていた。
「ま、叔父上！　何度申しあげたら、美伊の選んだお召し物を着てくださるのですか」
美伊は駆け寄ると、経久の着物をさっさと脱がしにかかったのだ。

「美伊はいつも申しておりましょう。これらの着物は、叔父上に似合いすぎまする。似合いすぎて、叔父上の怖さがみんな出ておる。相手に隙を見せることも大切じゃと、美伊はいつも申しておりましょう。叔母上、美伊が見立てた着物、お出しくださりませ」

「はいはい」

萩は笑って応じた。

どす黒くいかつい経久が、色白のぽっちゃりした十九歳の娘になすがままにされているのは、不思議というか、しまらない光景である。それを見ていた久兼などは、気を利かしてそっと部屋を出ていってしまったほどだ。

「戦さで京まで上りながら、何をしておられたのでござりますか」

「戦さをしておった」

「一つのことしかできぬ男は、これからの世を勝ち抜けませぬぞ、叔父上。大内義興殿のいでたちを学ばれましたか」

憮然としていた経久は、公家の匂いを漂わせた義興の顔を思い出して、口をへの字にゆがめた。その経久の顔の近くに、美伊は萩が出してきた優しげな青い色の着物を当てた。

「まッ、隙だらけ！　こうでなくては」

「……」

「叔父上、よろしゅうござりまするな。相手を油断させるのも着物、威圧するのも着物。着物は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

武具に等しゅうございまするぞ。……そ、瀬戸内を我がものにせんと狙うておる男は……ん、これくらいでちょうどじゃ」
「瀬戸内？　なんの話じゃ」
「瀬戸内の海の色を選んだ美伊は、さすがよのう」
美伊は勝手に一人で満足している。
「なんの話じゃ」
腹の中を読まれた経久は美伊の言葉にこだわったが、
「叔父上、これで瀬戸内では勝ったようなものじゃ」
経久の言葉など、聞いてはいない。
全く扱いかねる娘じゃと経久は美伊の顔を見つめていたが、その経久の口もとがぴくっと動くと、その表情は、「ふむ、これだッ」という確信に変わり、にんまりと笑った。
美伊の父・吉川国経が富田城に呼ばれたのは、その日からほどなくのことである。
「美伊殿を嫁に出しませぬか」
国経の前にどっかと座った経久は切り出した。
「ほう。いずこに？」
「毛利。毛利元就」
「……」

表情こそ変えなかったが、国経は経久を見つめたまま動かなかった。経久も見返したままだ。
ついに国経が口を開いた。
「されど、武田の首級をあげたとはいえ、毛利にはまださほどの力はござらぬ。まして元就は次男坊」
「……」
今度は経久が黙った。
「当家にとっても尼子家にとっても、さしたる益になるとは思えませぬ」
「思えずとも、元就に」
「何ゆえ、さように元就にこだわりまする」
「……」
またも無言の経久を国経は見つめた。やがて、経久の後方に、遠くではあるが青い海の色が揺れているのを国経は見たのだった。

「吉川はぜひにと……熱心にござった」
猿掛城の元就のもとへ婚姻の話を持ってきたのは、志道広良(しじひろよし)だった。
「評判が立った以上、どこからか婚姻の話は来そうな気はしておったが……」
元就は広良の顔を見た。見返した広良は、元就の表情から不本意であることを見てとったが、

「いかがいたしまする」
と、あえて尋ねた。
「よりによって吉川の娘か。……尼子うわばみが後ろにおるな」
うなずいた広良は、
「元就殿と吉川を結ぼうとは、実にいいところに目をつけたものと感心いたしました。さすがでござる。……うわばみは一度目をつけると、獲物を逃さぬそうですぞ、殿」
と、浮かぬ顔で考え込んでしまった元就を、少しからかうような口調で続けた。
だがこの話は元就の一存で否やの結論を出せるものではなく、毛利家当主・幸松丸の母として実権を握っている雪の方を通して重臣たちに諮られた。
「悪い話ではないと思うがのう」
広良は一同を見回して言った。
「大内の覚えもめでたい当家が、何ゆえに尼子の下につく必要がござる。冗談ではないわッ」
真っ先に反対したのは井上元兼だった。かねてより元就への忠誠を装いつつ大内氏に接触している元兼とすれば、当然の反応である。元就の祖父にあたる福原広俊も、吉川の後ろで糸を引いている経久を思うと、腹立たしさばかりが募って賛成はできなかった。
桂広澄と渡辺勝、それに元就の義理の弟である元綱にしてみれば、これまた返答に詰まる問題だった。尼子に通じている彼らにとって、尼子との絆が堅く結ばれることは喜ばしいことだが、

選ばれた相手が元綱でないことが問題だった。広澄にしてみれば、おのれが働いた結果、経久から重く用いられるのでなければ意味がなかった。元就の力が買われて尼子と結びつくのでは、元就の上に立つことはできないからだ。その点、勝の考えは少し違っていた。前の当主・興元を軟弱として見限った勝だったが、元就によって毛利が立ち直り、おのれは武将として血が沸くような仕事ができるなら、誰の下でもかまわないというのが勝の本音だったからだ。

「尼子経久、元就殿を買っておられるようじゃのう」

勝がそう言いながら広澄を見たが、広澄は不快を隠さず黙ったままだ。元綱も憮然としている。

「このように堂々と婚儀を申し入れてくるということは、尼子と吉川が強く結びついておることの証拠。我らと吉川は、大内や尼子に対抗せんとして盟約を結んだのではなかったのか。なんということじゃ」

雪が腹立たしげに嘆くのも当然だった。安芸国の国人盟約は、もはや崩壊しているのか。

「それだけ尼子の力が大きゅうなっておるということにござる」

確信を持って答えたのは広澄だった。

「志道殿、盟約のほかの国人衆は、まさか尼子に走ってはおるまいな」

「……」

雪の問いに広良は詰まった。それを見て勝は言った。

「孤立しては危のうござる」

誰もが真っ先に考えることだった。一同が雪を見て、元就を見た。
「元就殿、いかがなされまする？」
元綱が尋ねた。元就は一同を見回し、
「……盟約は死んでおるのか」
と、おのれに問うようにつぶやいてから、その返答を広良へ迫った。
「残念ながら」
広良が答えた。
元就には、毛利に否を言う余裕はないように思われたが、それでも受けるとは言えなかった。
結論が出ぬまま日が過ぎたが、そのあいだにこの婚姻にはっきりと否を唱えたのは、相合と杉だった。
郡山城の雪の方の部屋を訪ねた相合の方は、
「元就殿が尼子と結べば、幸松丸殿が元服する前に、毛利は元就殿に盗られまするぞ。お方様、幸松丸殿の前途をふさぎとうなければ、この婚姻は結んではなりませぬ」
と、同じ母親として雪の立場に心を配ったような言葉を並べたが、本音はその先にあった。
「尼子・吉川と毛利のつながりは、我が娘の松姫を嫁がせたことで、もはや十分のはずにござる。何ゆえ姫の兄の元綱殿ではのうて、元就殿に見返りが来るのじゃ。……いとしい姫を差し出した私の思いを踏みにじり、なんと悔しい……」

相合は口走っていた。賢明な雪は、さもあろうと、
「相合殿のご心配、ありがたいと思うておりまする。よう考えてみますゆえ……」
そう言ってひとまず相合を帰した。
猿掛城では、広良と元就が杉につかまっていた。
「杉はこの婚姻には反対にござりまする。亡き殿と雪の方を見ておって、ようわかった。家格の上の家から嫁をもらうと、男が縮こまって、ろくなことはござらぬ」
「それはそうやもしれぬ。雪の方はようできた方ゆえ、なんとかうまくいったが、鬼吉川の娘となれば、これは蛇に決まっておる。……されど……」
広良はうまく杉の意を迎えておきながら、元就を見た。
「当家の行く末を考えまするとと、蛇もまた一興かと……」
広良ににじり寄られた感じで元就は答えた。
「ようわかっておる。……今、尼子の息のかかった娘を娶(めと)ることは、政(まつりごと)の手だてとしては大きな利益じゃ」
「まッ！　母御前としては、息子に蛇娘の息なぞ吹きかけられては困りまする」
杉が大声で異議を唱えたが、広良は言った。
「蛇娘との、いや、尼子うわばみとのつながりも持ち、大内まむしとのつながりも持つ。何やら、八岐大蛇(やまたのおろち)のごとくでござるが、それしか毛利の行く道はござりませぬ。……次男で分家の元就殿

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com